

ひろがる DOHaD の世界

鈴木啓二

東海大学医学部専門診療学系小児科学

DOHaD は単なる学問の一分野ではありません。それは人の一生にわたって広がる、人生において最も重要な概念です。さらには世代を越えて広がり人種・民族、国境を越えて広がります。そして職種や学問の専門領域を越えて広がります。

それは 30 年前に発表された D Barker の英国における疫学的研究から始まりました。その後 DOHaD は地理的にみると旧英国連邦 (英国の旧植民地) の人々にリードされて展開してきました。過去の国際 DOHaD 学会の開催地をみると 2001 年インドの Mumbai (ボンベイ) に始まり 2015 年の Cape Town (南アフリカ) まで、Utrecht (オランダ)、Santiago (チリ)、Portland (米国) の各 1 回を除いて残り 6 回はすべて旧英国連邦の国々です。DOHaD の概念は発達期の特に栄養状態と将来の生活習慣病との関連性についての疫学的研究から始まりましたがこの疫学研究のフィールドとしてこれらの国々は重要な役割を果たしてきたのです。一方 DOHaD においてはヒトに比べて世代交代の短い動物やその組織・細胞を使った基礎研究は重要な研究手法となりますが、ネズミはともかく羊などの大型動物の実験ではオーストラリアやニュージーランドは大きく貢献してきました。

栄養から始まりましたが微生物環境・アレルギー、生活環境全般へと次第に広がりを見せてきた DOHaD は学問的研究という面のみならず先制医療、さらに保健、行政政策、教育という面でも世界的視野で考えていく必要があります。

DOHaD の世界レベルでの学会としては Society of Developmental Origins of Health and Disease がありますが、地区組織としては日本以外に Australia-New Zealand、Ibero-America (スペインと中南米のスペイン語圏とブラジル)、フランス語圏の国々などがありますが、オランダやドイツなどもこの分野ではアクティブで Rotterdam (オランダ) は 2017 年の国際 DOHaD 学会の主催予定地であるし、München (ドイツ) でも国際的学会を定期的に開催しています。

以上のような学会事情の近況を中心に、国際動向の一端をご紹介します。